

構口公園整備事業に伴う発掘調査概要

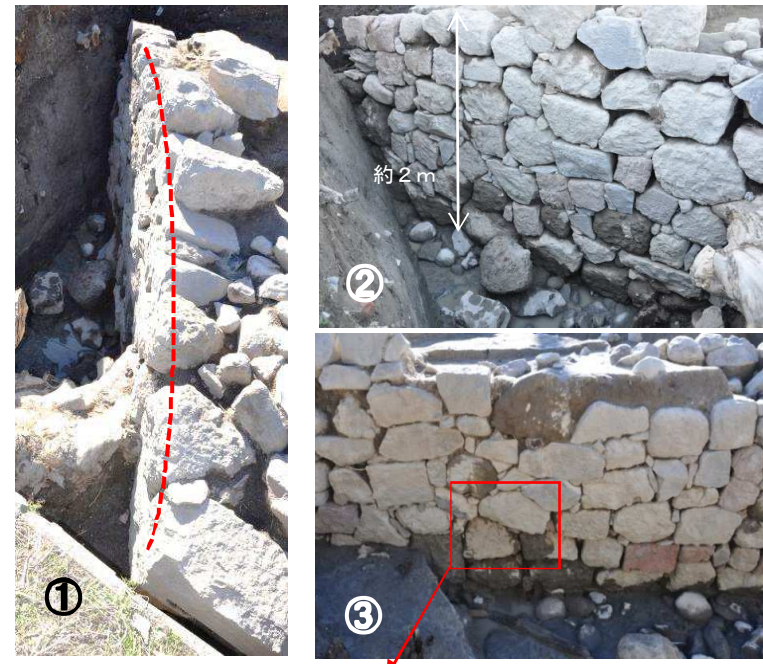
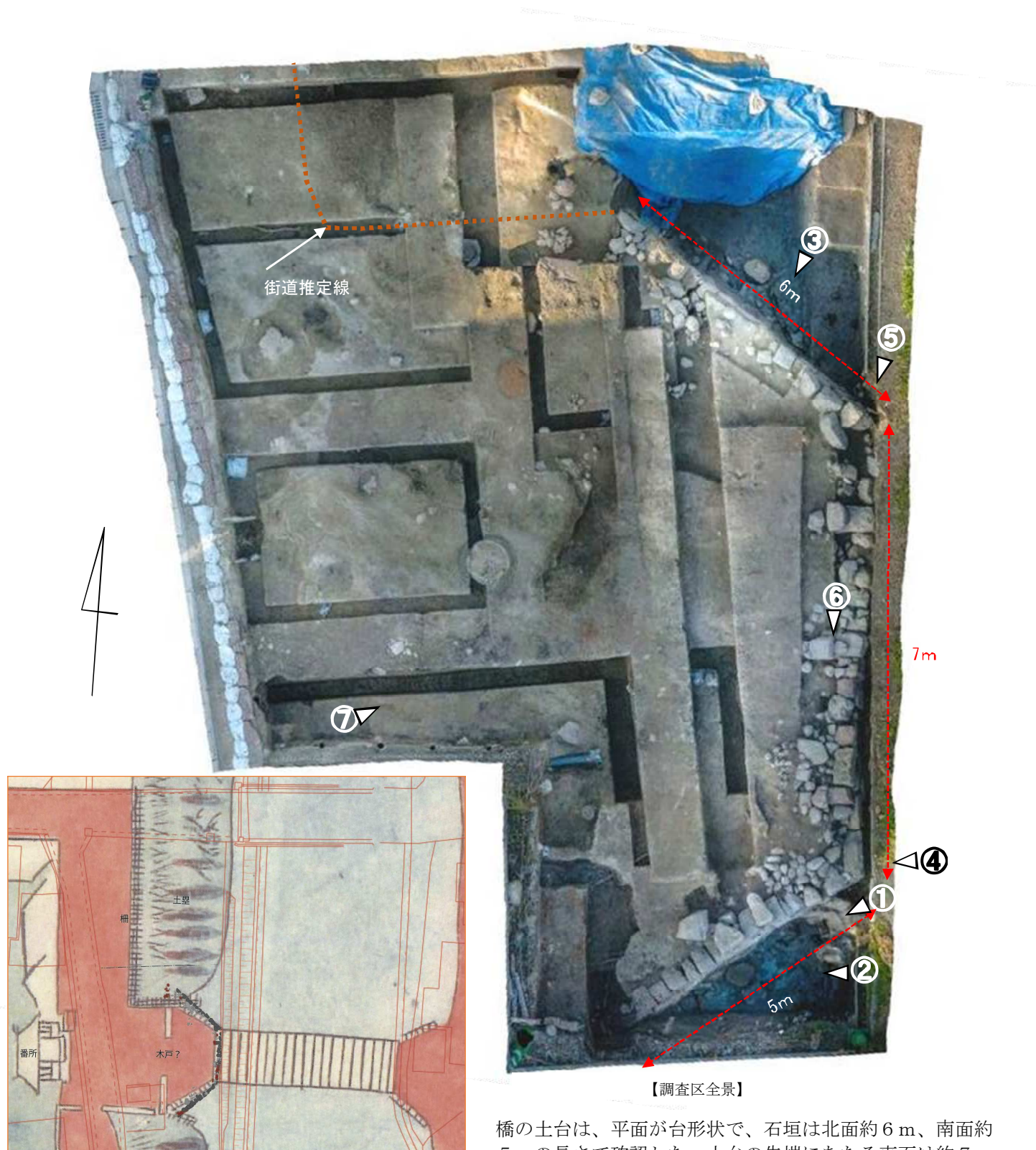
資料2

今回の発掘調査によって、橋の土台に築かれた石垣が発見され、橋の具体的な位置が明らかになるとともに、絵図に描かれている番所の位置も特定でき、この場所が佐賀城下への東入口であったことが明確になった。

【調査成果】

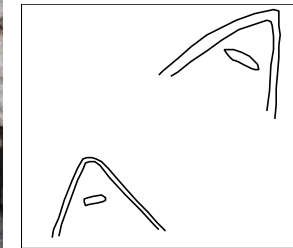
○佐賀城下の東入口に架かっていた橋の土台を発見し、石垣の規模や構造が明らかになった。

○街道を整備した際に行われた土木工事の痕跡と考えられるも整地層を確認した。



石垣の構築年代は、積石に佐賀城の堀で使われている赤石も見られることから1800年前後と考えられる。ただ、石に残る矢穴（石を切り出す時にあけられた穴）から、時代が古いと考えられる石も使われていることから、土台として機能していた長い年月の間で、石垣の修復が繰り返され、使える石材は再利用されていた事がうかがわれる。

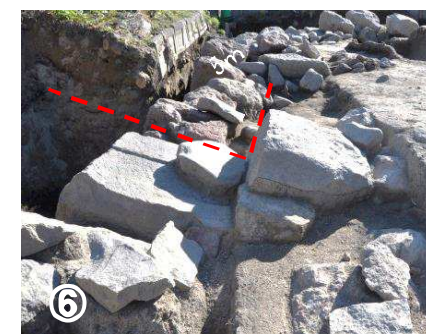
石垣は全体的に丁寧なつくりで、弧状に積むことで石垣が倒れにくくする「輪取り（わどり）」の技術を用いている。また、石の表面を整えるなど、見せることを意識したつくりとなっていることも特徴である。



佐賀城の石垣にもみられる「刻印」が施された積石が存在する。



隅角部分は「シノギ角」と呼ばれる鈍角になっている。これは佐賀城にも見られない積み方で、直角に積むよりも、高い技術を要するといわれる。



橋桁を支える「枕土台」の基礎と考えられる石組を確認した。この基礎はやや上向きに角度をもって設置されていることから、橋は「太鼓橋」だった可能性が想像される。



橋のたもと周辺で、地面を人工的に整地した部分を確認した。地盤の強化や排水機能を持たせるための措置と考えられ、砂と粘土を交互に繰り返し重ねて地面を硬化させている。当時の土木技術を知る貴重な資料である。